

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/07/01 ～2018/07/31)

1. 勉学の状況

Deutschkurs では、3格・4格での定冠詞・不定冠詞と形容詞の語尾の変化や、“ob”（～かどうか）を使った複文での質問の仕方などを教わった。Einkommen, Beschäftigung und Preisniveau では、これまで習った3つの市場を全て組み合わせて、賃金が自由に变化できる場合と、変化が硬直している場合に、それぞれの市場にある変数が変化すると、他の市場にどのような影響があるのか、について講義された。Democracy in the European Union の講義は、別の用事によってほとんど参加できなかったので、ここでの報告は差し控えさせていただきます。

2. 生活の状況

【ハウスパーティーにお呼ばれされました】

これは大分と前の話なのだが、飲み屋で知り合った初対面の男から、ハウスパーティーに誘われた。突然誘われたことに対する驚き、なんか怪しいんじゃないかという恐れと、人生初のハウスパーティーなるものに行ける喜びで訳がわからない顔になりながらお誘いを受けた。

ドイツだけかどうかは不明だが、ハウスパーティーに行く際には1つルールがある。それは必ず開始時間より遅れていく、ということだ。日本だと開始5分とか10分前に行くのが無難だったと思う(正直忘れてしまった)が、ドイツでそれはタブーである。何故なら、「まだ準備している時間だから」。当たり前っちゃ当たり前のことである。そこで私と友人はきっちり開始時間より遅れて行って、会場である男の家に着いた。今回はおせんべい、か〇ピー、き〇この山、たけ〇この里を差し入れると、結構興味深そうに見てもらえた。後で食べた感想を聞いてみると、どうやらおせんべいを気に入ったらしく、「旨味を凄い感じられて美味しい！」とのこと。お気に召してもらえてよかった。

後は初めて会った人に挨拶したり、一緒にゲームをしたり、歌っては酒を飲み、踊っては酒を飲む、をひたすらやっていた。あんなに五月蠅くしていたのに、ご近所さんから何も苦情が来ないあたり、どうやら恵まれた環境に住んでいるようである。そしてなんだかんだで朝4時、フラフラし

ながら別れを惜しみ、ケラケラ笑いながら友人達と家に帰った。あんなに酒を飲んだのは人生で初めてであったし、今後もそう飲むことはないだろう。そして家に帰るやいなや、ベットに倒れて眠りこける、なんてことはせず、1泊2日ニュルンベルク某マーケット探訪のための準備をして、2時間後には家を出発したのだった。移動中は、脳が波打つようにグラグラ動いている感覚で滅茶苦茶気持ち悪かったので、若いからといって飲み過ぎた後に旅行するのは絶対にやめましょう。

【東南欧26泊28日の旅: ブダペスト前編～1848年革命と自由戦争記念日～】

3月14日、ウィーンHbfから2時間半かけて我々はブダペスト・ケレティ駅に降り立った。降り立った瞬間、口にこそ出さなかったものの、頭のなかで「旧っ！」と叫んでしまった。京都を古都と呼ぶような美しさなんて欠片もなく、ただただ時の流れによって朽ち果てたかのようなおんぼろさだった。(特急に乗っている間にタイムスリップでもしたんじゃないのか)と錯覚しそうになる。その割に日曜日もやっているコンビニがあるんだから、なんとも不思議な国である。

そんな駅から地下鉄に乗り、今回泊まるホステルに到着。ヴェネツィアとは対照的に、ブダペストはほとんどのモノ・サービスの価格が安く、ホステルも1泊10ユーロ程度だった(!)。早速荷物を置いて市内を散策することに。王宮へ行ってみると、広場で何やら舞台の設営が行われていて、歩いているハンガリー人は、胸のあたりに国旗に使われている白・赤・緑の3色で織り成された布のバッチを付けていた。後で友人が調べたところによると、翌3月15日はハンガリー独立記念日、正式名称を「1848年革命と自由戦争記念日」といい、王宮前の広場では現在ハンガリー議会で与党の政党がイベントを開くらしい。更にその翌日の3月16日は、王宮が無料で開放されるという。こんな面白そうな機会を逃すわけにはいかないのだから、16日は王宮に行くことにした。

16日朝、この日はあいにくの雨だったが、王宮前広場に行くと既に長蛇の列ができていた。寒さと雨で全身がかじかむのをなんとか堪えて並ぶこと1時間、ようやく中に入れた。手荷物のX線検査を終えて先に進むと、冬の雨に耐えていた我々を解きほぐすかのように、煌びやかな踊り場が出迎えてくれた。大理石の床・紅の絨毯に、柱や壁の外装はほとんどが金でできており、柔らかな白熱球のシャンデリアがより優美さに輪をかける。そして一際天井が高いホールへ行くと、金をベースに大粒のルビー・エメラルド・ダイヤモンドが散りばめられた王冠や錫杖が展示されていた。両脇には衛兵がビシッと直立して警備しており、ちょうど見学していたときが立ち位置の交代の時間だったようで、面白半分には眺めていたのだが、これがまた驚きのものだった。鞘から剣を抜き、上体の

前に剣を立てたままゆっくりと王冠の周りを半周し、再び鞆に収める。この一連の動きの間に一切声を出すことは無く、また微塵なズレすらなかったのである。その後小1時間程度見学していたが、こんなに豪華な建築を観るのは初めてで、見終わる最後まで息を飲んで、感嘆の息を出していた。この王宮は見るだけで一生の思い出に花を添えることは間違いないので、ブダペストに行かれる方には是非オススメしたい場所であった。

【東南欧 26泊 28日の旅: ブダペスト後編～飽きるまで風呂入ってみた～】

ハンガリーは日本に負けぬ温泉大国。冬の時期でもあるし、何より留学を始めてからほぼ半年、湯船には浸かってないので、ハンガリーで温泉に入ることはこの旅の1つの目標であった。ブダペスト滞在中の3日間、毎日温泉に入りに行った筆者が、ハンガリーの温泉の特徴をお教えしようと思う。

まず日本では考えられないのが、基本的にスパは男女混浴だということだ。もちろん我々は知恵の実を食べる前のアダムとイブではないので、入浴に際しては水着を着用しなければならない。ハンガリーでは、公衆浴場は身体を洗ったりするお風呂ではなく、スパリゾートや医療目的として利用されているようだ。なので、日本みたいに浴槽の隣に体を洗うところがあるわけではなく、少し離れたシャワースペースで私は体を洗っていた。ちなみに、カメラを持ち込んで撮影しても問題ないらしい(筆者は試さなかったもので、本当かどうかは不明である)。

お湯の温度は28度のぬるま湯から38度のあったかいお湯まで様々あり、日本の温泉のような40度台の温泉は少ない。その為、皆1時間や2時間平気で湯船に浸かるので、喉が乾いた時用に無料の飲料水が出るコーナーがちらほらある。さらに温泉だけでなく、プールやサウナもあるので、本当にスパリゾートという感じだ。規模の大きいところや有名な温泉は人が多いので、落ち着いて入りたい人は中・小規模の温泉に行くといいだろう。

値段は温泉の大きさによって変わるが、3000～5000フォリント程度。外湯に来たと考えると少し高く感じるかもしれないが、何種類も湯船があり、また各施設によって様式が全然違うので、異国のスパに来たと考えれば安いと思う。ブダペストの温泉は硫黄の源泉なのか、独特の卵臭さを少し感じ、個人的にはあまり好きではなかったが、友達や家族で来るときっと楽しい思い出になるだろうから、ふらっと寄ってみるのも一興だと思う。こんな書き方はしているが、結論としては”風呂に入ることに飽きなどない”であった。

[次回予告]…温泉に入り続け、ふやけにふやけた筆者は夜のウィーンへと

再び降り立つ。3月半ばも過ぎたのに、雪が降りしきる極寒のウィーンは一瞬で体を凍てつかせたが、ウィーンにはウィーンなりの温かみがまたあるのだった…。Nächste Mal、【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】

そして、来月からは夏休みスペシャルとして、旅行記ページを増大！ウィーンを発った後は、チェコの首都プラハへ。その一大観光名所として知られるプラハ城・カレル橋を見て、あまりの面白くなさにがっかりする筆者。果たしてこの街に魅力的なスポットはあるのだろうか。Google 先生が教えてくれる、一筋の光明とはいったい…？【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・隠された調合～】もお楽しみに。

今回は【地元民もあまり行かない？ライン川になぜかあるビーチに行ってみた】、【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・隠された調合～】について書いていこうかと思えます。